



飛行第三連隊の甲式四型戦闘機と九一式戦闘機（手前）の尾翼（当時の絵葉書より）。

昭和12年までの 陸軍戦闘機の部隊標識

解説/作図・横川裕一 Text by YOKOKAWA Yuichi

海軍機と比べて人気の低い陸軍機がそれに勝る輝きを見せるのは、垂直尾翼を彩る個性豊かな部隊マークであろう。

この素晴らしい意匠の部隊標識も公式には昭和12年からで、それ以前は何の面白みもないものであった。公式にと言ったのは、書類では許されていない部隊標識が昭和6年春には見え始めていることからである。

本稿では、市販書では採り上げられないことがない昭和12年までの塗粧や部隊標識を、甲式四型、九一式、九二式の戦闘機に絞って取り上げてみたい。

1. 陸軍機の塗粧、標識と標示

「塗粧」とは聞きなれない言葉だが、塗装の正式語で、現在の海上自衛隊でも使用されている用語である。この規定により陸軍飛行機の塗装が決まり、日章（日の丸）や機体番号、機種名などが「標識と標示」にしたがって標記されている。

これらの規定は大正時代から数回改定されているが、昭和一桁時代の陸軍飛行機が適用を受けたものは、昭和2年に制定された「標識と標示」である。

●大正7年、10年制定の標識および標示

両年の制定版の違いは名称の変更（「二式（ニューポール式）」から「甲式」等）くらいで、規定内容は次であった。

- 機体番号の標示は、方向舵と翼下面のみ
- 名称（機種名）や製造年月は、自重・総重量とともに方向舵に標示

機体色も軍で統一となっておらず機種によってさまざまで、甲式四型戦闘機（以下、甲四戦）の輸入機は、方向舵・昇降舵を赤で塗って区別していた。写真1に、甲四戦の例を示す。

●昭和2年制定の標識および標示

この版で制定された内容は、以下である。また、この通牒に前後して、機体の塗装色が「灰緑色」に統一された。

昭和2年11月 陸普第五四一号「陸

軍軍用航空機標識及び標示の件」

一、航空機の標識

飛行機及び気球の標識は、日章（赤色）とし、飛行機にありては上（下）翼の上（下）面（単葉機にありては翼の上下面）の両端及び胴体両側の中央または之に準ずる位置に対称に標示するものとする。

二、航空機の名称及び番号等の表示

イ、名称

飛行機の名称は方向舵の両面にして中央より上方に横書きす。

発動機の名称は…。(後略)

ロ、番号

飛行機の番号は上（下）翼の上（下）面（単葉機にありては翼の上下面）及び胴体に日章の後方に標示す。(後略)

ハ、製造年月

飛行機の製造年月は方向舵右側に標示す。

この版では方向舵への標示が幾分簡素化され、翼上面や胴体への機体番号が追加された。個体管理（飛行時間、整備間隔）のために容易に識別できる必要が出てきのだらう。

標示例を図1、写真2に示す。

2. 昭和12年制定の標識および標示

昭和12年、満洲事変以降の実戦経験を踏まえた、防諜上の理由が前面に出た内容へ改正された。いわゆる「胴体日の丸なし塗装」である。

昭和12年2月、陸普第四七五号「陸軍軍用航空機標識規定改定の件」

現行の規定は昭和二年改正せられたるにして爾後諸般の状況一変し、特に左記理由により現行規定の改定の必要を認めたものとする。



写真1. 大正7年制定版にもとづく甲四戦（当時の絵葉書より）。

- 一、番号、製作年月日、及び名称を大書明記するは防諜上不利なり。
- 二、胴体両側の日章は、射撃目標となる不利あり。
- 三、(気球の件) 略

陸軍軍用飛行機の標識及標示方、左の規定通り。

一、飛行機の標識は、陸軍軍用機標識は、日章(赤色)とし、上(下)翼の上(下)面(単葉機は翼の上下面)両端に標示するものとす。

二、飛行機の部隊及び機別を標示するため、方向舵及び昇降舵両面、「プロペラボス」覆い(またはこれに相当する部位)、車輪または車輪覆いに色彩または適宜の標示を施すことを得。

附記

昭和二年十一月七日陸軍軍用航空機の標識及びその標示方は、これを廃止す(句読点、下線筆者)。

写真3に、九一式戦闘機(以下、九一戦)の例を示す。胴体に日章や機体番号がなく、方向舵上部の機種名もないという、昭和12年制定版の特徴をよく表わしている。所沢航空発祥記念館にある九一戦二型も、胴体日章・機体番号がないことから、この版が適用されていると考えられる。

3. 昭和12年以前の部隊標識

一方、昭和12年版には、興味深い一文がある。標識および標示の第二項(前掲下線部)がそれで、「飛行機の部隊別及び機別を標示するため、方向舵及び昇降舵両面に(中略)、色彩または適宜の標示を施すことを得。」となっている。防諜面より、空中での識別の必要性や部隊標識による士気向上が意識されたのだろう。

したがって、昭和12年版以前では尾翼の部隊標識は公式には存在していないはずだが、実際には甲四戦で昭和6年春の時点で方向舵を彩色し、部隊標識らしいマークを入れているのが分かっている。写真4は甲四戦の絵葉書だが、これと同じ方向舵塗粧の機体が『航空事情』という雑誌(陸軍省航空会発行)の昭和6年6月号に掲載されている。この円い標識は、恐らく明野陸軍

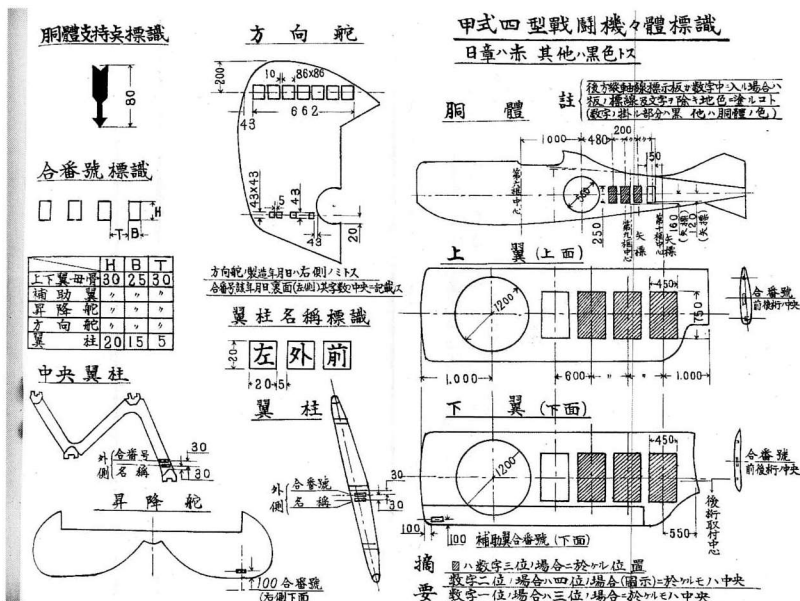


図1. 甲式四型戦闘機の機体標識(『塗粧法教程(昭和9年10月、所沢陸軍飛行学校)』提供:ARAWASI)。

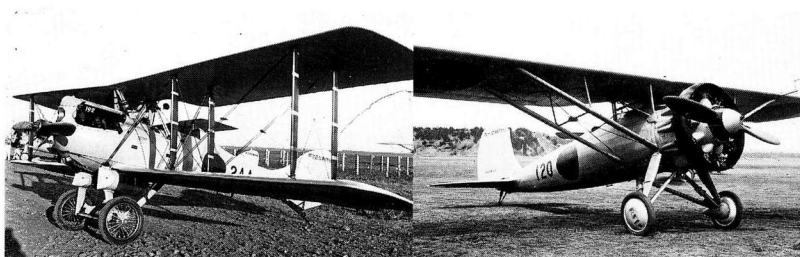


写真2. 上は甲式四型戦闘機、右は九一式戦闘機、右は九二式戦闘機(甲式四型戦闘機以外は、当時の絵葉書より)。胴体に日の丸と機体番号が見えるのが、昭和2年版の特徴である。九一式戦闘機の方向舵(右面)には、製造年月も見え。方向舵右面の機種名は、九一戦は一貫して左読み(左から右へ)であるが、対して九二戦は途中から右読みになっている。

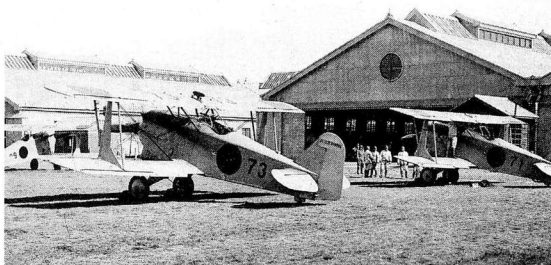


写真3. 昭和12年版による九一戦の標識と標示(当時の絵葉書より)。



写真4. 甲式四型戦闘機の部隊標識(当時の絵葉書より)。

飛行学校を示していると考えられ、写真3も同様であろう。また、昭和7年9月に起きた満洲事変では、いくつかの部隊が満洲（現在の中国東北地方）に派遣されているが、それらの機体にはすでに部隊標識が確認できるものもある。

これらは暗黙の部隊マークであり、戦闘隊（戦闘機隊）で確認できる標識を以降に示す。

●飛行第一連隊（岐阜県各務ヶ原）

昭和7年3月に甲四戦から九一戦への機種改変が始まり、13年春から九七式戦闘機へ改変となった。

本連隊の部隊標識は方向舵と昇降舵への帯1本で、甲四戦の例を写真5に示す。この部隊標識は九一戦にも引き継がれており（写真6）、方向舵を塗っているのが分かる写真7もある。昭和9年正月の新聞記事にも、方向舵を彩色した写真が掲載されており、中隊毎に色を分けることが行なわれていたようだ。

●飛行第三連隊（滋賀県八日市）

飛一連隊と同様、甲四戦から九一戦に機種改変されたが、昭和8年8月をもって戦闘中隊を飛行第五連隊の偵察2個中隊と交換、偵察中隊に改編された。

本連隊機は、甲四戦において複数種類の部隊標識が分かっており、写真8の太帯はその1つ。後述する飛行第六連隊のものと似ているが、方向舵のホーン部（前方へ突き出ている部分）に帯がかかっていないのが識別点である。

もう1つは写真9で、飛行第三連隊を示すと思われる帯3本である。方向舵が彩色されているように見える写真もあり、中隊毎に変えていたようだ。

この3本帯は、九一戦に引き継がれ

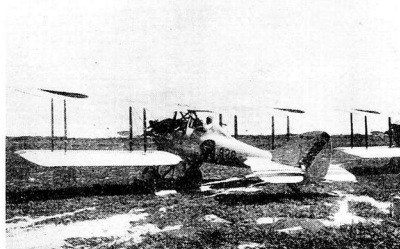
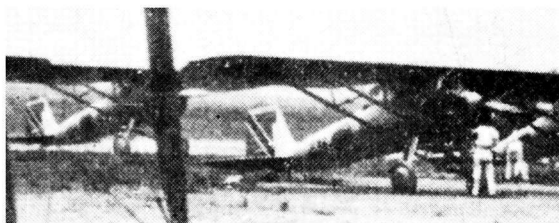


写真5. 飛行第一連隊の甲式四型戦闘機（当時の絵葉書より）。

↑ 写真6. 昭和8年10月、明野における飛行第一連隊機（提供: ARAWASI）。

← 写真7. 飛行第一連隊機（『非常時 国防写真大鑑』（昭和9年9月）より）。



たことも確認できる（写真10）。そしてタイトル写真（P.76）は、この当時のもっとも派手な部隊標識であったろうと思われる飛三連隊機である。驚くべきことに、方向舵のみならず垂直尾翼や水平尾翼全体を彩色しており、衆目を集めたことだろう。かなり手が込んでいた印象から、恐らく連隊のシンボリックな機体、現在の米海軍で言えばCAGバード（空母航空団司令機）のような存在ではなかったかと考える。

●飛行第四連隊（福岡県大刀洗）

昭和7年秋に、戦闘2個中隊が甲四戦から九二式戦闘機（以下、九二戦と記す）へ機種改変され、11年1月以降、九五式戦闘機への改変を開始している。

飛行場名の「大刀洗」は、1359年「筑後川の戦い」において傷つきながらも勝利を収めた武将・菊池武光が、刀の血糊を川で洗ったことに由来しており、本連隊機の方向舵には「川に（刀の）鐔」の文様を描いていた（写真11参照）。

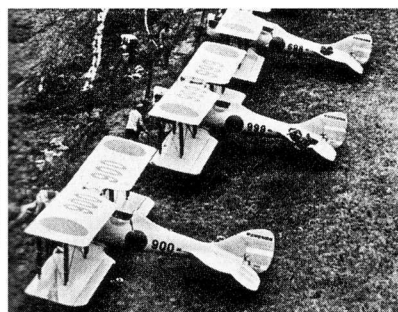


写真8. 飛行第三連隊の甲式四型戦闘機（当時の絵葉書より）。

↑ 写真9. 白帯3本の甲式四型戦闘機。昭和7年11月大阪・木津川飛行場での撮影と思われる。

← 写真10. 飛行第三連隊の九一戦（当時の絵葉書より）。

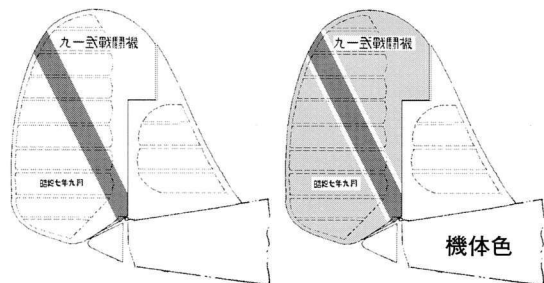


図2. 上2種は飛行第一連隊機の垂直尾翼（九一戦）。

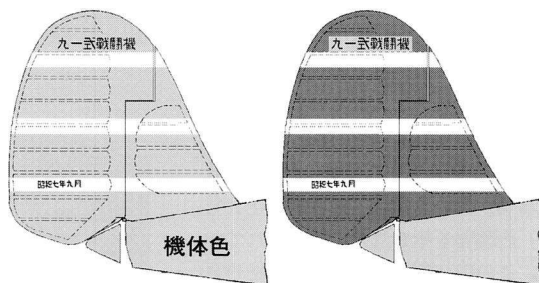


図3. 上2種は飛行第三連隊機の垂直尾翼（九一戦）。

他連隊の方向舵への彩色では機種名や製造年月、機体番号を塗り残しているが、本連隊では薄く塗っているように見えるのが特徴である。保護用の上塗りがされているようにも見えるので、九二戦に共通することかもしれない。

なお、九二戦方向舵右面の機種名は、最初は左読み（左から右）であったが、途中から右読みに変更されている。

●飛行第五連隊（東京府立川）

昭和8年8月に九一戦2個中隊を飛行第三連隊と交換し、戦闘中隊を編成。11年12月から九五式戦闘機への改変が開始された。

本連隊機は写真12に示すように方向舵と昇降舵を彩色しているが、新聞地方版から昭和8年9月の初頭の時点で実施されていることが判明している。この部隊標識は、後に同僚偵察中隊の九四式偵察機や八八式偵察機でも用いられた。

●飛行第六連隊／独立飛行第十中隊（朝鮮 平壤）

飛四連隊と同じく、昭和7年秋以降に戦闘2個中隊が甲四戦から九二戦へ機種改変し、11年1月以降に九五式戦闘機への改変を開始している。

本連隊機の甲四戦では方向舵の太帯が部隊標識で、方向舵のホーン部に帯がかかっているのが特徴である。その下の部分も彩色されている。

昭和6年9月の満洲事変発生時には、本連隊から独立飛行第十中隊として甲四戦が派遣されている。その様子を写真13、14に示す。写真13の八八式偵察機も、方向舵彩色が見て取れる。派遣当初は、飛六連隊と独飛十中隊の部隊標識の区別はなかったと思われる。

独飛十中隊は、派遣中の昭和7年4月下旬に、九二戦の交付を受けており、翌年10月下旬に原隊に復帰した。

●飛行第十一大隊／連隊（満洲 ハルビン）

飛行第十一大隊として編成、昭和7年6月に満洲へ派遣された。編成当初は九一戦、九二戦の混合装備であったが、9年9月に九一戦装備へ一本化さ



写真11. 飛行第四連隊機の「川に錨」文様（当時の絵葉書より）。

図4. 飛行第四連隊機の垂直尾翼（九二戦）。

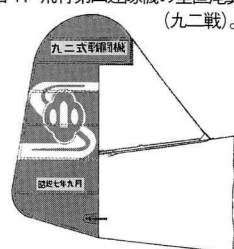


写真12. 飛行第五連隊の九一戦（昭和11年1月の撮影）。

図5. 飛行第五連隊機の垂直尾翼（九一戦）。

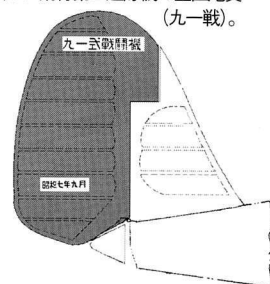


写真13. 満洲に派遣された際の飛行第六連隊機（当時の絵葉書より）。右は画面右を拡大したもの。

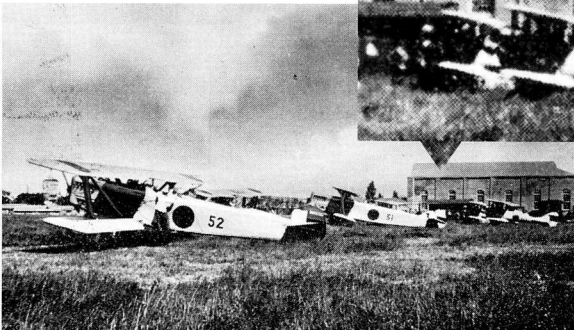
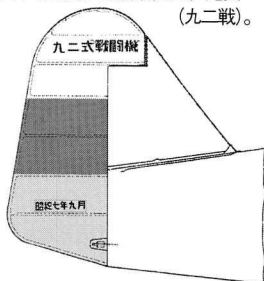


図6. 飛行第六連隊機の垂直尾翼（九二戦）。



↓ 写真14. 独立飛行第十中隊の甲四戦（提供：ARAWASI）。

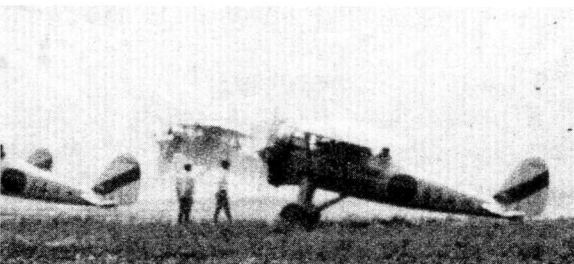
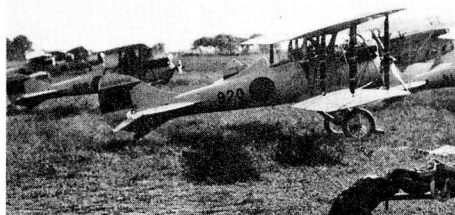


写真15. 飛行第十一大隊機。右手前の機体は、愛国83「東電」号である（当時の絵葉書より）。

図7. 下2種は飛行第十一大隊(上)と連隊(下)の垂直尾翼(九一戦)。

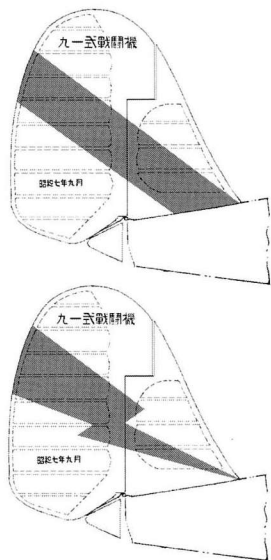


写真16. 飛行第十一連隊機(提供: ARAWASI)。

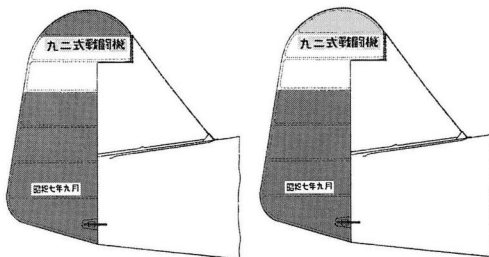


図8. 上2種は部隊不明機の垂直尾翼(九二戦)。

写真17(右). 16機並んだ九二戦の列線の右端の2機。全体が写っている同じ写真は『写真集 日本の航空史(上)』に掲載されている。方向舵の機種名は、塗り残し部分とは異なる光沢なのか、微妙に見え方が異なる、これは九二戦に共通である。

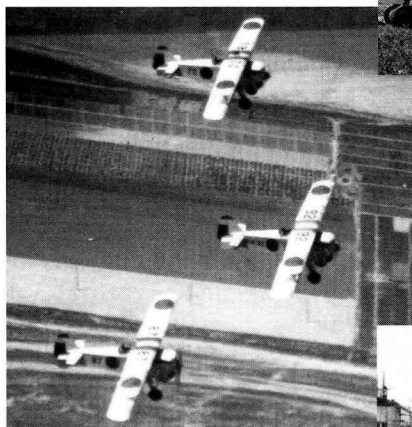


写真19(右).「ホロンバイルの都 ハイハル風景 海拉爾西屯飛行場」の九二戦(当時の絵葉書著より)。



写真18(左). 上写真と同部隊と思われる編隊飛行写真(4編隊12機)の先頭小隊を拡大したもの。主翼の帯に注目。先頭機は、愛国92「横浜」号(昭和8年8月8日、横浜にて命名式)、左翼機は70号機、右翼機は87号機である。



れ、12年12月から九七戦へと改変した。

九一戦では写真15や図7(上)に示す垂直尾翼の斜め太帯を用いていたことが分かっている。加えて、車輪も彩色されていることも分かる。また、写真では見えないが、水平安定板の後縁にも帯があった。

大隊は昭和10年12月に飛行連隊へ改編され、垂直尾翼や水平尾翼には電光(稲妻、図7(下))が描かれるようになった。写真16はその例だが、車輪も

同色で塗られていることが分かる。また、プロペラボス覆い(スピナー)も、プロペラ色(灰緑色)には見えない。

なお、この電光マークは九七戦、一式戦、四式戦と継承されている。

●不明部隊

写真17、18は部隊不明の九二戦写真である。方向舵は帯を外して彩色され、同じパターンで昇降舵も塗られている。さらに写真18から、昇降舵の彩色で抜

かれた部分が、まるで移動したかのような帯が主翼に描かれている。

九二戦でのこのような塗装例は知られておらず、貴重な写真である。この2枚の写真からは、機体番号51、55、65、70、87、そして愛国92「横浜」号が確認できる。愛国「横浜」号は昭和8年8月8日命名式の献納機で、写真18の撮影はそれ以降と分かる。また、87号機は、88号機とともに昭和9年2月に飛六連隊から関東軍野戦航空廠へ交付されていることが、軍書類によって判明している。よって、この写真が昭和8年8月から9年2月までの間の撮影であれば飛六連隊、2月以降9月までであれば飛十一大隊の九二戦中隊となろう。

また、手許の絵葉書を整理していたところ、「ホロンバイルの都 ハイハル風景 爾西屯飛行場」と銘打たれた絵葉書を発見した(写真19)。そこには同じ塗装の九二戦が映っていたことから、飛行第十一大隊/連隊である可能性が強くなった。

なお、『日本陸軍機の計画物語』(昭和55年9月)に愛国92「横浜」号の写真があり、その尾翼は写真17・18と同じ塗り分けだが、方向舵の頂部は色が薄いように見える。頂部を中隊で塗り分けていた可能性もある。

部隊標識が確認されていない他の九二戦装備部隊には飛行第八連隊(台湾屏東)があるが、本写真の該当部隊をご存知の方が居られれば、情報をお寄せいただきたい。

4.終わりに

以上、日本陸軍機標識の遷移と、公式には認められていなかった時代の戦闘隊の部隊標識を示した。本稿によって、後に混乱する部隊標識への土壌が早期から育まれていたことを認識いただければ幸甚である。また、標識の有無によって、およその撮影時期が類推できることも知っていただけたと思う。

この時期の陸軍戦闘機である九一戦、九二戦に、塗装図で楽しめる機体があったことは素直に嬉しい。現時点ではよいキットがない機種であり、国産品の出現を望みたい。